

昭和  
四十  
九年

十七

月二  
十五日

發行三種郵便物  
(每月一回・十五日發行)

(通第三〇五号)

池山先生三十七回忌特集

次

法味滴

々 池山栄吉 (1)

父を想

う 池山敏朗 (3)

池山先生のことども

松本解雄 (5)

池山先生の思出

保木俊雄 (11)

池山先生の追憶

榎原徳草 (14)

池山清夫人を憶う

花田正夫 (19)

第二十六卷

第十号

# 慈光

# 法味滴々

池山栄吉

## 聖人の常の仰せ

「親鸞におきてはただ念佛して弥陀にたすけられまいらすべし」

と、よきひとの仰せをこうむりて信じられた刹那、聖人の心肝に滲み出た文字

「陀<sup>トダ</sup>助の五劫思惟の願をよくよく案すればひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」

とあるが、聖人の常の仰せである。

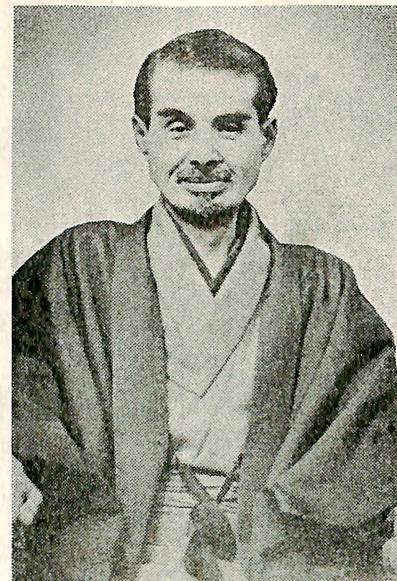
これは聖人の獲信の原体験であり、同時にまた、其後につづくもろもろの体験の下地（したじ）である。だから聖人のどの御述懐でもよい。たとえば『歎異抄』にある御言葉の一つに見入ってみると、きっとその底から、この文字が滲み出でてくる。啄木の歌に

灯影（ほかげ）なき室に我あり

父と母、壁の中より杖つきて出（いづ）

とあるように。

昭和八年九月、信道誌、奉行録より。



昭和十二年大谷大学教授時代の  
池山先生

## 俱会一処

「今生夢のうちのちぎりをしるべとして、来生のきとりの前の縁（えにし）を結ばんとなり。われおくれなば、人にみちびかれ、われさきたたば、人をみちびきて、世に知識となり、生々に善友となりて、ながく迷執を絶たむ」

亡き妻が不治の病にかかって、それとしれたとき、悲歎のなかから、うれしさの身にあまるのを覚えたのは、唯信鈔の結びのこの文であった。

楽しきはじめ憶うごと

哀（かな）しきおわり堪えがたしやがて幽明（ゆうめい）さかいをへだても、心と心とは永久に結びつけられて、淨土の対面を期することが出来るからである。

信道誌、奉行録より

## 遺詠抄

信道誌、奉行録より

たのまるただ念佛のわれにありさるべき業はさもあらばあれ

慘怛たる悔いのこせし一一のあとかたもなき無碍の一

われならぬ清らのわれのわれにありて穢惡のわれをわれ道



# 父　　を　　想　　う

池　山　敏　朗

## 父　と　子

久しくも子は叛きしかな

家を捨て世を乱し  
ひたすらに進みし焰の道——

人の世の定めなきに  
しみじみと心打たれて

亡びざる正義いすこと  
大空を仰ぎし日まで

久しくも子は叛きしかな。  
久しくも父は待ちしかな、

子を思い夢に泣き  
ひたすらに忍びし涙の道——

歩みたき道を歩み  
力尽き望み絶えなば

いつにも家に帰れと  
久しくも父は待ちしかな、  
子を思い夢に泣き  
ひたすらに忍びし涙の道——

歩みたき道を歩み  
力尽き望み絶えなば

いつにも家に帰れと

世の人のそしりに堪えて  
久しくも父は待ちしかな。

父と子のえにし深きかな、  
讃えつつ歌いつつ

今や共に歩む光の道——

子の歩みたどたどしく  
若き日の悩み尽きねど

求むるは父と同じく  
とこしえの絶対価値（ならびなきかち）

父と子のえにし深きかな。  
父と子のえにし深きかな。

父と子のえにし深きかな。  
父と子のえにし深きかな。

父と子のえにし深きかな。  
父と子のえにし深きかな。

昭和十二年頃

## 神　木

四、五日降り続いた雨が止んで、からりと晴れた五月のはじめ——

丘の上に高く聳えている一本の老樹——それは樹齢千年と云われる樺の大木であった。

ついこないだまでは、すっかり落葉していく針の様に鋭い梢はさむざむと虚空を刺していた。幹の頂は幾度か嵐に吹き折られてその跡が痛ましく尖っていた。それまことに「神木」と呼ばれるにふさわしい姿であった。

それが今は——枝という枝、梢という梢から、一面に燃える様な若芽が吹き出している！丘の若草や若木のそれにも増して美しい、輝く様な緑のよそおい！

ああ、千年の老樹に秘められていたこの情熱は何か？大地のエネルギー、五月のエネルギー、老を知らぬ大自然のエネルギーだ！

私の驚きは喜びに変った。

——おお、ここにまことのすがたがある！  
私の眼前に死んだ父の顔が浮んだ。

理想を愛した父！  
若さを愛した父！

青年を愛した父！

そしてみずからも最後まで青年であった父！

昭和十四年

——糞！それが宗教なのか！

私は昂然と空を仰いだ。そして愕然と驚いた。

『ああ、神木が芽を吹いている……』

私は魂を振り動かされた様に感じてつぶやいた。

# 池山先生のことども

松本解雄

池山先生との出会いを語るには、先ず花田師との出会いに触れねばなりません。それは昭和三年四、五月頃かと思ひます。私は京都大学で法律学を一通りやつてみたが、どうしても一生の仕事としてやってゆく気になれず、それに当時は、就職難の時代で「大学を出たけれど」という有様でありまして、一年でも半年でも文学部、特に哲学、宗教の講義を聽講したいものと決意し、文学部に再入学したわけでございます。あだかも同じ春花田師が、岡山医大を退学され、京大文学部哲学科に入学されました。

当時、私は下鴨の知四明寮にご厄介になつて居りました関係上、京都大学の仏教青年会の幹事のような仕事をして五箇所ある京大の掲示場に張つて歩いていました。それが縁になり、全く見ず知らずの両人が、由緒ある京都の地で出会うことになり、それ以来今日に至るまで、私は花田師からなみなみならないお導きを頂いているのでございます。

かな歓迎会を催うした折であります。

露台で暫くお待ちしておりますと、先生はステッキを振り振り、ゆっくりと奥様と河原町の方から歩いて来られました。あの時のいかにも落着いた足どりは、それから十年余、否、先生のご一生を一貫した足どりであつたと思われます。それ程その時の先生の歩調は印象深いものであります。

その後先生のお話を度々聴聞する縁に恵まれたのであります。その都度、最初のタベに感じた先生の歩調と同じようなものを感じました。ゆくくではあるが、その底に無限の力を藏せられて、聴衆に深い深い感銘を与えるにはおかなかつたのであります。このように文字通り悠揚せまらないお態度は、日常のご生活の中にもじみ出ていたようと思われます。その一例としてあげると、たとえば日曜日などに蓮華谷のお宅に伺うと、書斎で静かに読書されていたのでしょう、先生自ら玄関でお迎えされました。大島の着物を召され、帯を稍々横の方に結んでいられたお姿で「いらっしゃい、さあ、どうぞ」とさびのあるお声、今もなつかしく耳底に残つているようであります。

昭和六年秋十一月、信仰篤かった林田陸子夫人が若くしてこの世を後にお淨土に往かれました。東山の京都女專を中心として、多くの若い女性の間に、念佛の大法を弘めら

す。その年の秋月末、菊薫る頃、花田師のおられた八幡郊外の善照寺の報恩講に参詣することになり、当時熱烈に布教の第一線に立つておられた横田慶哉先生にお目にかかる御縁に恵まれ、父を失つて十年余、人の世の矛盾と自己の弱さに懊惱の日々を送つていた私は、はじめてお念佛の力強さとその無限のお光の中に夜明けさせていただいたのでございます。

さて池山先生との出会いでありますが、花田師からすでに池山先生についてのお話は兩三度聞いたように思われるのですが、いいかげんな聞き方であつたのでしょうか、その内容は全く覚えていないという有様で、今から思えばまさに慚愧の至りであります。

それはともかくと致しまして、私は池山先生に初めてお目にかかつたのは、先生が大谷大学教授として京都に来られてからで、時は昭和四年の春、騒々しい花見時も過ぎようとする五月のある夕べ、二条寺町の鎧屋の二階でささや

れた夫人を突如として失つたことは、私達にとって實に大きな歎きであります。この大きな悲しみが、今はなき池山先生の上にも拝されました。それは密葬の日であります。先生には礼装を召され、大谷大学のグラウンドの東側にあった林田さんのお宅に来られ、ねんごろに仏前に焼香礼拝され、お念佛のうちに別れをされました。やがて出棺となり、靈柩車は一先ず烏丸通りの方へ行き、道を南にとつて、大山の火葬場へと向かったのでした。その時、先生は靈柩車が見えなくなるまで、直立されたままでジッとお見送りされておりました。

あの時の先生のお姿は、何故か私にはいつまでも忘れることが出来ません。かつて先生がご講演の中で、野戦場で主人を失つた忠犬がいつまでも、主人の行つた方に向つて首を長くし、悲しい眼付でみつめていたというお話を承ったことがあります。今も、あの晚秋の夕べ靈柩車を見送られた先生のお姿と二重写しなつて脳裡に刻まれております。

又年ははつきり致しませんが、三月のある日、奈良市の淨教寺へご講演に行かれた時であります。うす曇つたその日は非常に寒く、おそらく寒さはこの上もなくお嫌いであられた先生が、控室の小座敷で火鉢を囲んでいられた時でさえも、むしろお氣の毒に思われた位でした。

やがて広い本堂で約一時間ばかりお話をされ、もとの部屋にお帰えりになり「寒いですね、全く今日は声が凍つてしまつ出ませんでしたよ」と。それでもお慈悲の風呂につかってここにこされながら話されたお言葉。声が凍るとはどんなことだろうかとフト考えさせられはしたが、実にうまい言いあらわし方であると深く感じました。

以上、私は池山先生について、既に「呼子鳥」や一道会で発表致しました中から抜萃して述べさせて頂きました。

最後に、これも「慈光」第十二巻第二号で発表させていただいたのですが、今読みかえしてみると、いよいよその味いの深いのに驚歎するばかりですので再録させていただきます。以下は先生のご講演を拝聴した折のノートです。

### 池山先生講話抄

○  
万物流転する中において、心の立脚点は最も重大なる問題である。頼む力、頼まるる力、頼ませたまう大御力に会うこととはむつかしい。

○  
その力は唯一無二で本来そう沢山あるべきものではない。但し世間には似て非なるものが非常に多い。

○  
一のはなのはなよりは 三十六百千億の  
仏身もひかりも等しくて 相好金山のごとなり。  
相好ごとに百千の ひかりを十方にはなちてぞ  
つねに妙法ときひろめ 衆生を仏道にいたらしむ。  
いらしむる

○  
人口問題の起らぬ宇宙の最大の都は淨土である。

○  
その淨土は、誰のためにでもない、特に私のために、私達のために作られたのである。

○  
お淨土を作つて下さった、たつた一つの心。その心は、見るからにぞつとする醜い人の心が、愛くるしい玉の心と見えて「完全なる生ける人にしてやりたい」との願いが長時不斷の火と燃えている。

○  
朽木(くちき)は彫(え)るべからず、糞土の牆(かき)は塗(ぬ)るべからず。手のつけようもない悪いものがそのままひとりでに転化して、絶対完全の域(いき)に進むというなら、つじつまのあわない話だが、他から加わる威力によつて転成するのだとすれば、それは必ずしもあり得ないとは言えない。

○  
その力は、自分の力ではない、又他の力でもない、又自然界的の唯物の力でもない。

○  
また単なる真理という抽象的なものでもない。また理念、觀念、悟り、でもない。

○  
その力は、心であり、生ける心である。それは人間と同等、若しくはそれ以下の心ではない。人間以上の超人の心である。

○  
ありていに言えば、私には、超人的で、しかも概念的でない実在的心としては、唯一つでしかない。すでにその心があるから無数の起人的心が実在としてうけとられてくるのである。

○  
超人的、実在的心のはたらきを、和讃に  
一のはなのはなよりは 三十六百千億の  
光明てらして朗らかに 到らぬところはさらになし。

○  
朱に交われば赤くなる。毘(いざり)も乗物にのせても  
らえば、千里万里の遠きにも、やすやすと達することが出  
来る。その力の可能化のあらわれによつて、完全なものに  
転化する。

○  
その力は、その一つなる心は、私共に呼びかける。

○  
しかし、何と似て非なる声の多いことよ。丁度奈良や伊勢に行くと、宿引き、土産売りが、あっちからも、こっちからも客に呼びかけて、客を引いているように。  
けれども、問題は懷中如何(ふところかげん)による。  
懷中無一物の旅人はふりむくわけにいくまい。呼び手も見  
すててしまう。

○  
ところが、ふところかげんがどうであろうと、どこどこ  
までも、相も変らずついて呼んで下さる心がある。  
それは何と呼びかけているか

○  
「一心正念にして直(ただち)に来れ」  
「オネガヒダカラ、スグキテオクレヨ」

○  
人間の官能は、心耳は、それ自身その声を完全に捕捉す

ることが出来ない。なおまた心構えが出来ていない。

ている。一人一人心の主をもつ。異口同音の一人一人の声は心の主の呼び声への回答である。

然し人生万事、縁の下の聴聞から、桐一葉、さらに愛別離苦等々、見るもの聞くものが、何時か私共に、その声が離れるように力を合わせてゐる。

人生の行路難に、右に迷い左に間違うが、その間違いを通して眞実（まこと）を認識せしめられるように出来ている。

心の主、その實在を心証することがむつかしい。

さどることは成程てつとり早く行くように思われる。しかし、悟りはその経過がむつかしい、又その先は心細いことはないかね。

よい先生に会うことが肝心である。

法然上人：善導大師。親鸞聖人：法然上人。その師の心を通じて、實在の心にも接触し得られる。

心の主の呼び声は、無数の人々の一人一人にぢかに向つ

虚心<sup>く</sup>担懐<sup>くわい</sup>の時には、ある意志のこもった声を聞くと、同称同和する。それをくり返しているうちに、それがだんだん深く奥へ奥へと入り、遂にはその奥底へ徹せしめる。これを、呼び声の自動作用といふ。

呼び声の意味の深さが知れば、それに正比例して自己というものがわかつてくる。これを呼び声の精練作用（ふるい作用）といふ。

自己の真相が知らしめられる極促に、呼び声のまことが知られる、これを呼び声の顯彰作用といふ。

お念佛もまんざら捨てたものではない、これは初めの段階である。

「地獄への道はよき意図をもって敷きつめられている」

未来のことは、美しい理想の花で飾られているが、実際は、志すことと違うて、地獄の道から逃れられない。して見れば、呼び声が一番いいと気づいたところ、これが第二段階である。しかしここでは相対的である。

この呼び声は、頼む人と、頼ませる人とをつなぐ頼みの綱であり、ここに切っても切れぬたのもしさが崩す

この声を聞く機縁のない人もあり、聞いても反感をもつ人もあり、馬耳東風と聞き流す人もある。

しかし時節が到来するであろう。そしてその声を聞いた人、傾到した人でも、受取り方は違うが、心の主との切れぬある交渉は同じだ。

さて、その声を聞き始めてから、それが徹底するに三つの段階がある。それは、呼び声の価値を認める程度による。それも捨てたものでもないという最底の評価から、これは余計な仕事ではない、なくてはならぬ仕事をしているのである、と知れるまでの段階である

お互の段階は何處か。

呼び声が聞えて、思わず「オオ」と返答するのが第三段階である。

「引鉄（ひきがね）は心で引くな」というのが射撃の秘訣だそうだが、心の上や、行の上で、ぎこちない力（ちから）こぶの見える間は、自然の妙境とは相去ること遠しである。

「寒夜に霜のおくよう」に心の主の意図が身に沁みて、呼び声に返答せずにいられなくなつた境界、呼ぶ者と答える者がひとつにとろけて、呼びつ答えつ、答えつ呼びつ<sup>う</sup>。声こそは、発して正鵠（せいこう）を失わぬものと言えよう。（慈光、十二卷、二号）



# 池山先生の思い出

保木俊雄

にかかっていました。

私は滋賀県今津町の大谷派の寺に生まれましたが、滋賀県には八百も寺院があり、皆小さいので経済的に難儀していましたから、私は医学をやろうと云い出しました。寺の総代が大反対しました。それでも京都の府立医大を受験しましたが、志願者も多く落第しました。その時一番喜んだのは母でした。大谷大学に入って、出発の時「お前はしやわせ者じや、大学には立派な先生が沢山居られるから」とはげましてくれました。母は『法藏』誌を読んでいましたので先生方をよく知っていました。

入学した最初の宣誓式に、佐々木月樵先生が「この大学に入ったら必ず真実の信心を得るために勉強し、信心にめざめたらすぐ寺に帰って、小さくとも、念佛の生活をして、唯一人でもよい、念佛の同行を得るようにせねばならぬ。そのために三年か六年の勉強する様に」と云われました。私もそのようになりたいと願ひながらあちこちと迷っていたけれど、眞の念佛のことが何時も心

て会場に走せつけました。数人の話はすんでいて花田師の話が始っていました。話のうちにも高声の念佛に心がうたれました。

私も寺生れで、念佛を申し、本堂に参らねば食事が出来ない様なしつけを受けておりましたけれど、何か物足らぬものがあり、本当の念佛を身につけたいと内心に願っていました。そうした時、今まで聞いたことのない生き生きとした念佛の声を聞き、会が終りましたので友達に何処かで食事をしようと誘われましたが、何か私はドン底におとされた思いがして、ひとりで寮に帰って、机に坐って知らぬ間に歎異抄を開いていました。

次の朝に、川畑愛義先生に連れられて、京都府下八幡の横田慶哉先生を訪ねましたが、相憎くお留守で、深草の西本誠哉師を紹介され、二時間ばかりお話を下さいました。その時に、色々の話の末、

「みんなが仏によつてたすけられているのに、保木君だけ別にされるはずはないではないか……」  
と強く教えられました。それまで、自分だけは仏のみ心からはずれないとへだててばかり居たが、その時「私も救われる」とへだての壁が破られて、私が私に納得出来る身にさせて貰いました。

東本願寺での法話の時、能登の同行が「一念を言うて下さる方はあまりない」と云つて喜んでくれましたが、この一念に、昨日の私が死んで新しい私が生れ、念佛の智慧を頂いて、私が私になりきつて、私自身の道を納得して生かして頂けるのであります。

阿弥陀經に、青色青光、赤色赤光、白色白光、黄色黄光とあります、私は私の業をうけて、この世に生をうけて

六十五まで歩んできました。私は私だけで、五十年四十年

前を振り返って、人間として負うて行かねばならぬ一本道を辿つきましたが、それがそのまま念佛の恵みの中に輝いて、青色は青光の味いを頂いております。

話はあとさきになりますが、京都の学生時代に信心に気づかせて頂き、京都で学生親鸞会を結び、京大、谷大、竜大、府立医大、同志社大学、三高、京都女專、奈良の女高師等々の念佛の友と月々集いを開き、年に一二回は大会を催しました。

又聖鸞寮や学道舎で有志の者が同宿して、池山先生には度々ご講話を願いし、私も友人と一緒に先生のお宅に度々伺いお世話をなりました。

その後、大阪で、女子親鸞会が出来、大丸や阪大の看護婦さんや一般の女子青年の集いもはじまり、池山先生に数回講話を願いしました。

又、岡崎市にも飛火して、岡崎親鸞会が結ばれ、杉浦さんの宅で先生のお宿をお願いし、岡崎公園内の異閑で二度ばかり大会が催されました。

しかし、三十六年前、十一月三日に、先生は浄土に還えられました。それは淋しくまた悲しい限りでありますけれど、お念佛の中でいつも御一緒して下さり、私共の手を

とつて淨土に導いて下さるのであります。

私の家に、池山先生の大軸があります。それに

「しかるに仏かねてしろしめして」

と墨痕あざやかに書いてありますが、これは私がダバオの東本願寺に昭和九年八月に出向きました時、お別れに先生をお訪ねしますと、今晚は泊れと云われ、朝筆をとつて頂いたもので、四幅書いて下さいました。又送別会の時は伝導者、布教者というような題でお話し下さり、何かと励ましてくれましたことは忘れ得ぬ思い出であります。

昭和四十九年六月三十日、岡崎市異閑に於ての  
池山先生三十七回忌記念講演会の法話の抄出。

### 波 岡 茂 輝 氏 遺 詠

我一人往生すとも何かせん親子し往かば地獄だによし

幾度か見てなほ飽かぬ己が手を又さしのべてしみじみと  
見つ 病床にて

我が声の力足らねば呼べどよべどこだまもなくて消ゆる  
寂しさ

## 池山先生の追憶

榊原徳草

ていた私には、うつろな、むなしさだけが残った。

そんな第一回の先生との邂逅といふか触れ初めというか本当に落莫たるものだったが、それがどういう経路を辿つたのか、はつきりした記憶はないが、いつとはなしに、先生が聖人をして「私に無くつちやならない聖人」と仰言つた、そのままに、私になくてはならない唯一無二の「好き人」となってしまったのである。思うに先生との初の出会いの空しさは、私と先生とのレベルの差の余りに大きかつたためで、恰も富士山の一合目あたりへ突然立たされた私の心に写った富士山は何の変哲もない石コロや雑草の景色であつて、靈峰富士の妙なる全容ははるかに雲の中に姿を隠していたと云えよう、何のことではない猫に小判だつたわけである。

私が初めて先生の御講話を拝聴したのは下總会館で、それは花田先生の御さそいによってであった。講題は「繼母ままはは」で、確かドイツ語の本を持ってそれを訳しながらのお話であった。私は有名な先生のお話を期待して緊張して拝聴したが、それがすっかり外れて、何の感動も受けなかつた。お帰りを皆さんと一緒に見送りしたが、紺の背広姿に鳥打帽をかぶり薄茶色の雨外套を小脇に自動車に乗り込まれるお姿を見送つて、車の走り去るのを眼で追つ

それがいつとはなしに、先生の「ただ念佛して」の一句に凝結された德音に、次第に化せられて、私の闇夜の灯炬となり、大悲の願船そのものとなつたのである。

私は心の悪いが湧き揚るとき、胸の乱れに困った時、いつでも蓮華谷に先生を訪ねて打ち明け、曝け出して先生に訴えた。その都度、先生はいつも「ああそうですか、南無阿弥陀仏」のご応答だった。そして先生のお念仏を聞いて又私もそれに引き入れられてお念仏する、そうしている間にすっかり晴れて心も身も軽く、明るくなつて、いそいそと、あの坂を下りたものである。お訪ねする時には坂の下で、こう申上げたら「そんなことでは」と言わればしないか、ああ云つたらよいかと、煙草を何本も喫して考えこんだ挙句に思い切つて、先生に叱られ、捨てられても仕方がないと、決心して登った坂道を、帰りには高らかに快よいお念仏で足取り軽く下りて行く私。

こういうことを何度も繰り返した。そして「私には池山先生がある、どんな悩みが起きたって大丈夫なんだ、先生のところへ行けば一切解決するんだ」という私の畢竟依(ひつきようえ)が先生だったのである。

私が昭和十二年九月に日支事変の第二回大動員令で召集令状を受けて出征の時、私は直に先生にこれを電報でお知らせした。そして京都駅から原隊の静岡県三島の野戦重砲兵第二聯隊へ出発のため、駅の待合で見送りの人々と列車を待っている所へ、池山先生の奥様が見え、私の寺まで来られたが出発後だったので直に駅に来て下さった由である。

そして言われるには、先生は昨夜は私の出征と近角常観師の御子息の出征との二つの報告を受けられて、一夜、輶転反側されて眠られなかつたとのことであった。私は先生が私のために夜中一睡もされずに思つて下さる大慈悲に思わず有難涙に顔を伏せた。常々先生を師とは仰いでいても、それ程までに心をこめて親のように真底から同悲同感していく下さるとは思えなかつたのに、先生はそうだったので、よし御國のために死を賭して征こうと心に誓うのだった。

戦場で鉄兜をかぶつて棉畑に匍匐して戦つているとき、内地からの慰問袋がとどいた。開けてみると、京都親鸞会からの慰問品と、それから寄せ書きがあつた。法友諸兄姉が四方に斜めに書いてあって、真中に先生の筆で、

必無死難(必ず死の難無けん)→  
我能護汝(我れ能く汝を護らん)

と書かれてある。これは二河白道の西岸から如来様の呼び声であるが、弾丸飛来の下で拝したこの語は、如来招喚の声であるままま池山先生の「私がついているよ、決して死になんかしない」と私を護つて呼びかけて下さる声であつた。私は感涙にむせんだのであつた。

無事に戦地から帰つて先生をお訪ねすると大徳寺料理で御馳走して下さつた。

心を深く仰げば「オネガヒダカラ」と拝讀しても誤りではあるまいと思うと仰言つた。演壇に双手をつかれて聴衆に向つて「オネガヒダカラスグキテオクレヨ」と、頭を低く下げられた御姿に、満堂の聴衆から静かなお念仏の波が湧き挙つたこと、皆合掌して先生を拝んだことを覚えている

此頃、先生の一周年に編集された追憶録の「呼子鳥」を拝讀していると、岡山の中村柾次様の文章の中に「或時先生は私に、一心正念直來を、一心正念にして直ちに来る」と読んでもまさか見当は外れては居るまいなアと云われた」とあるのに気づき、先生は前々から、一心正念直來をどうしたら我々に直接ひびくようにできるかと心を碎いて居られた悲心を拝するのである。

いつだつたかお訪ねしたとき、壁に色紙が懸けてあつたそれは先生の筆跡鮮かに

「よろこばぬにて」

とあった。この中の「ぬ」の字は「奴」という字に近くそれがまた實に「悪い奴」のようなわざと悪筆を模して書いてあげますよ、と言われたが、遂に書いて頂けなかつた。

顯道会館での御講話の時「汝一心正念にして直に来れ」のお話があつて、先生はこれを訓読みされて「直來」を「スグキテオクレヨ」と読まれ「一心正念」を、如来の大悲

先生御往生になつてから、どういう因縁か先生の洋間の壁際に安置してあつた御仏壇の下の箱が私の所に安置されることになった。この中には先生はじめ清子奥様や御子息友子奥様など御一族の御遺骨が納められてあつた。

法友の淨財によつて昭和三十九年に建立された名号碑は

碑面に先生筆の御名号と裏面に一心正念直来（オネガヒダカラスグキテオクレヨ）が刻まれており、その下に先生と御

一族の御遺骨が納まつてゐる。今先生のお好きな萩が名号

碑の庭に一面に枝を垂れて、そろそろ咲き出す頃となつた

この碑が建立されてから丁度十年目である、今年の一道会は先生の三十七回忌に当る。五月には三河の岡崎の旧親鸞会の人々の発起によつて、岡崎公園の先生のゆかりも深い異閣で三十七回忌が催され我々有縁の者が集つて先生の恩徳を謝しまつたことである。この秋の当寺の一道会には又々全国から有縁の法友が集つて「ただ念佛してのたのもしさ」の先生の阿弥陀湯に浴するよろこびにお遭い下さることであろう。

先生は、人に遭うとは肉体にあうことではない、その人の思想、感情といった内なるものにあうことである、と言われた。

これは先生の「聖人に親灸して」の中の言葉である。七百年前の聖人に「親鸞におきてはただ念佛して云々」の歎

私は蓮華谷のお宅を訪ね、先生を好き人と唯一無二の振り所としていたので、先生が亡くなられたときは途方に暮れたが、だんだん心の落着きを得てから、先生はお念佛に生きておられたのだったと気づいて、先生とはお念佛だったと思いついて、しつくりと南無阿弥陀仏一つに落着くことが出来たようである。先生が蓮如上人の白骨の御文の「ただ白骨のみぞ残れり」とあるのになぞらえて「ただ念佛のみぞ残れり」と仰言つたが、この語が、雲間に皎々と照り映える仲秋の明月のように私の煩惱具足の穢身に照りわたるのである。

噫！どうしたことの強縁であろう。先生の御仏壇の一部を頂き、先生の御遺骨います名号に毎朝参拝する身になります。先生は私一人が一番気がかりで、心配でならないか

つたから私に憑（つ）いて離れられない。しかしうぬぼれの強い私は、初めは私を可愛いと思われるからだと思いあがつて喜んでいたが、この名利心が変だなと思うようになってから、涅槃経の、子牛が母牛を離れず後から追いついて行くように、如來は私に一つになつて下さるとあることを思い浮べて、一番厄介な性格破綻の煩惱熾盛の私に寄り添うて離れたまわぬのだと、名号碑を挙げるようになったのである。

この名号碑の碑名は、二千年は持つと石屋さんが言った。この寺も無くなり、歴史は浮沈興亡をくり返えしても、二千年の間は厳然と此所に輝くことと信じる。

昭和四十九年、九月六日、稿了



久人村山内山石屋  
斯山法界院

一法句南無阿弥陀仏という言葉は、阿弥陀仏が衆生救済の願いが完成したことを衆生に名告せられてある一枚のつづれ錦のようなものである。これを裏からいふと一切衆生の苦惱の生死相をそのまま攝取して織られた錦である。裏から見るとぼろぼろの糸の集合のようであるが、これを表から見ると見事なつづれ錦である。

『大経』は古来「機ありて、法を説く、法を説いて機現わる。機現われて、法に帰し、法に帰して法をとうとぶ」というようにいわれている。

○

この教の起源を尋ねると『觀經』は現実の苦惱に堪えざるもののが法を聞く起源となるのである。『大経』は法の流を聞いて現実の人間苦に眼ざめを持つのである。

○

『大経』は古来「機ありて、法を説く、法を説いて機現わる。機現われて、法に帰し、法に帰して法をとうとぶ」というようにいわれている。

池山清夫人を憶う

花田正夫

池山先生は明治三十年頃、清夫人と結婚せられました。夫人は、代々の江戸っ子で、祖父にあたる方は江戸詰めの武士でありました。寿夫様のお話では、「母はせいはあまり高くなかったんですが、ずっと江戸で住んでチャキチャキの江戸っ子、今の言葉で云えば大変気っ派の切れた負けん気の女でした。明治維新で武士の録を召し上げられお祖父さんになると大変な心配がつた。一番上が男の子で次が女、母はその下で三人きょうだいで、兄は学校へ入ったんですが、何時行かせられなくなるか分らん、そしたらお前をたたき売るんだと云つて、母の小さい時から色々な芸事を仕込んだそうです。母もその気になつて、兄さんが学校へ行けなくなつたら自分は芸者になる気だったそうです。それで母の死ぬまで家には三味線がひとさおありました。母は本当に芸事に堪能で、殊に常盤津が得意でした。そういう風に仕込まれた関係もあって負けん気で、また非常に涙もろ

い弱い面もありました。父は四十一まで真宗ひきの  
ドイツ語学者という立場でしたが、母なんかは宗教的匂  
いは癌になるまでは殆んど無かったような人でした。父  
が高等学校につとめるようになつて岡山に移りましてか  
らも、私が中学を卒える頃まで家は経済的に緊迫してお  
りました。父も母も贅沢な生活していたのでもありませ  
んが、東京で父が社会事業のある事業に色々な事情で  
すっかり駄目になりその余波がずうっと続いていたから  
だと思います。その中で母は泣きごと一つ云わざ一生懸  
命やつっていましたが、私の小さい時心に残っている母と  
いうと、子供や主人に色んな物を食べさせて、自分がお  
膳の時は、母さん何だつて食べないんだと思われる位、  
おこうこやおみおつけなんかですましやつて、サアサ  
アと云つてたすぎがけになるような母でした」

マチスに加えて胃の加減が悪くなり色々と胃薬など服用されましたが、食欲もなく従つて瘦せるばかりという始末で、岡山県病院で検診をうけられました。その時の模様を近角先生への御手紙に清夫人は次のように書かれました。

「……私事御存じの通り、かねてレウマチスにてなやみおりましたが、七月以来、非常に胃が悪くなりました。それも矢張り服薬の作用で胃を悪くすることと存じ、医者より健胃薬など貰つて居りましたが、益々やせるばかり、元気は少しも変りませぬが、食事も漸く一ぜんやつといたたく位、あまり衰弱いたしますので、病院へ行き診てもらいましたら、胃癌のこと、あからさまにそれは申しませぬが、それをききました時の私の失望、何とも申しようが御座いませんでした。八十六の老母、および生母は七十余の老人をあとに残し、五人の子供のあととの始末、主人のこの後の不自由を思いまして実に上氣いたさんばかりでした。

しかしとうぞ御安心下さいまし。この刹那の非常の失望と同時にハッと如来の御慈悲と申すことに心づき、アアもう、なつかしいと申したところで共に暮らせるものではないし、もう手をひいて下さるあなたにお任せするより行く処はないし心づくと共に、胸もはりさけるほどの切なさが、スーと開けまして、アアこの病気が万一主

人でどうしたらどうであろう。財産はないし、老人子供と病夫を抱え、長い間には収入の途も絶え、そのむごたらしさは如何ばかり、アア私であつてこんな喜ばしいことはない、是も皆おはからいによるとスッカリと元気も直り平氣で病院より帰つて参りました。

併し、帰宅後、主人、寿夫、らく子に右の次第を申しますして、主人は今までの苦労を氣の毒と申し、子供はわがままばかりして誠にすみませんでした、許して下さいと申しては泣きますし、両三日と申すものは、どうもこうもならぬ程でしたが、信仰のありがたさ、主人もすっかり思い直し、この頃では最早、私は死したるもの故、一日一日と生きのびさせていただいている、アアありがたい事と喜んで、養生と服薬を怠りなく致して居ります。

病院ではこの冬中いかがと申したのだそうですが、私の立場としましては、明日であろうと、また半年後であろうと変りはありませんが、子供のためには一日でもながく居る方がよろしいと、主人も申して居ります……」

と、それまでは池山先生の話などを時折り聞いていられても深くそれを心に受けとめてありがたがられる様子もなかつたのに、胃癌の宣告をそれとなしに受けた一瞬に仏の慈悲に気づかれ、平常心をとりもどされて、治らぬなりにも一日でも永く生きられるような食養法や、また成るだ

け苦痛をすくなくする方法等を聞いて、遠い道を車にも乗らないで帰られましたそうであります。

そこへ池山先生が帰られて診察の結果は、ときかれると「御注文通り畠が新しくなりますよ、胃癌で手の施しようもない」とのことです」と、落着いて告げられましたが先生には青天の霹靂で大変驚かされました、又御子様方の歎きは言語に絶しました。然し六高の一年生だった寿夫様は、実感として直ぐには感じられず、まだ大病といつても容色もさほど衰えず、元気で家事をしていられるのを見て、胃癌とハッキリきまつたのでもない、何か方法を考えればよいのに、父も母も駄目ときめてお慈悲がありがたいなどといつているのに抵抗さえ覚えられたそうであります。

然し、夫人はその翌日から家族の着物や下着、蒲団や夜具類の修理や洗濯、家の整理を始められ、庭の片隅でそつと何かを燃やし、簞笥や戸棚の引出しには悉く貼紙をして内容をしるして分類されました。

当時、一番下の御子さんにその夜から添寝をやめ、邪慳な位に突っ放し「姉ちゃんとおねんねおし」と言って、十五のらく子さんの寝床に入れ、夜のオシッコも、朝の着換えにも夫人は一切手を出されませんでした。

ところが寿夫様が本当に慌て出されたのは年が明けてからだつたそうであります。目に見えて衰弱が加わり、これ

お前は馬鹿だよ、馬鹿だね」といわれた言葉は寿夫様のからだを愛情で包み、一生涯その中に抱れてくらすようになられました由であります。

ここで池山先生に学生時代からお世話になつた松江岩人師が見舞の時の清夫人の模様を要約します。

「奥様は癌の宣告をうけられて、その中から念佛にかえられ、主人でなくてよかつた、又この病気はお粥を炊きそれを摺つて布で漉したのを小さい盆で一杯づつ、隨時に頂いて居れば胃の痛みも余りありません。又一里位は歩けますから日曜には主人に案内されて此世の見納めと思って散歩しています。近く死ぬのですから頭の道具も不要の着物も売り、子供達のものを買って新しく造つてやつて居ます。序に後妻も私が生きているうちに決めて下さい、よく頼んで安心して死にたいのですが、主人は大変条件が多く至急には見つかりませんから、女中さんか婆やさんでも温なしい方を世話して下さい。私の葬式は松江さんに頼みます。」と話がつきませんでしたが、その間先生は微笑しながら念佛しておられました。その時、奥様に、歎異抄に、苦惱の旧里はすて難いとありますが、奥様はお淨土の近づくことをお喜びでしようとおたずねしたら、私は一家のため一日でも生き延びたいです、生きる以上は成るべく苦しめた

は本当に死ぬるんじやなかろうかと心配になり、何とも云えぬ氣持に追いやられて、お母様の死ということに直面せられるようになられました。

その頃「寿夫、歯をなおさないでよかつたよ」と、しみじみと、死んで行く夫人が、子供を沢山産んで歯が非常に悪かったのに、子供達に買っておきたいものが沢山あつたので、無駄錢をつかわなかつてよかつたと云われたのであります、こうした言葉が寿夫様の心中深く刻みこまれました。しかし何よりも強く寿夫様の心を打つたのは三月のはじめであります。学年末試験の勉強中、夜更けてあまり寒いので二階からおりて炬燵のある部屋に入られると、家中みんな寝てお母さん一人が炬燵にあたつて居られ、自然に向い会つてじつと顔を見入ると、もう本当に憔悴していられるのにたまりかねて——それまでお母さんの前では涙は見せまいと決心していられたのに一気持がこみあげてつい下を向いて涙をこぼされたのです。その時です、「何だね寿夫！」とお母様がたしなめられ、「母さん、僕はまだ何も母さんにしてあげられなかつたね」といわれる、と、「馬鹿だね、お前は、馬鹿だよ。何かしてもらおうと思つて子供を育てる親なんかありやしないよ、馬鹿だよお前は」と鉄火のような調子で頭から叱られました。馬鹿と人に云われると腹が立ちますが、この時のお母様の「

くない、そして皆を悩ませたくありません。未来のことは何とも思つたことはありません、歎異抄通りですよ。併しこの通りお助けにあづかってお慈悲に護られて居ります以上、未来も決してお見捨て下さらぬと確信しています」と、仰言つたとのことでした。

次に近角先生の御見舞の法話会は七年の一月中旬でした。これもかねて池山先生が希望していられたのですが、近角先生が、直接病人に話すよりも、有縁の人々に集つて貴い一般的に見舞の話をしようとの申出があつて、会合が催されたのです。その時近角先生は歎異抄の九章を主に引用せられて、お慈悲の至極を話され、撫順の炭坑の爆発で遭難した向坊さんの実話を例にあげられました。その日夫人はお元気で食事の給仕までせられお喜びも一入でしたが、近角先生は特に「今日は非常に喜んでいられるが、いよいよ最後となり、五人の子達を残して往くとなると、名残りはつきますまい。平素喜んで念佛していた向坊さんが爆発で卒倒した時シマツタ！と云つただけでした。みんなで色々介抱して幸い息を吹きかえした時ナムアミダブツでした。この時生命終れば淨土、まだ生命つきずにナムアミダブツで蘇つたのでした。このいよいよとなるとシマツタより外ない者をことに憐み給うことがたのもしいのです」と

いうように慰問せられると、夫人は「みんなが今日私の喜んでいるのを見て感心だと云われますが、先生ばかりはよいよとなるとよろこべぬところを見抜いて下さつてのおさとして本当にあり難うございました。と申しますのも病苦が劇しいとお念佛も出ませず、苦しいばかりですが、それによつてお救いには微塵も疑いはありませんけれど、子達が見て、それが信仰の道の障りになりはしないかと心配していましたが、そんな心配も無用になりました」と深く味われました。

二月から三月に入ると癌の末期症状があらわれ、腹膜炎で腹水がたまつて随分苦労せられましたが五月に遂に亡くなられました。その時の御様子を池山先生が近角先生に次の様に御札をかねて報告せられました、要約いたしました。

### 近角老兄

どうとう往きました。病症が癌とわかつてから半歳余になりました、しみじみと名残りを惜ませて貰いました。が遂に名残りはつきませんでした。妻の死ぬ数日前、今迄に覚えぬ胸苦しさを感じるとして、これが臨終ならんと申し、傍に居た私の腕をひしとわが胸に抱き、枕頭に待していた娘に一つ二つ心得となるべきことを云いきかしたときは、一滴の涙が頬を伝わりました。医師を呼び漿

どうでしよう、苦惱の有情（うじょう）をすてたまわざる淨土の慈悲の御心の發動は、我等夫妻をして、今生の愛別離苦をさえ忘れしめ、たち難き恩愛のきずなをすぐたれました、ああ何たる偉大な御力でしよう。

その夕べ、妻は病床に身を起させまして、庭のおもてを眺めながら、氷じるこをこしらえさせて頂きました。食べ終りまして、ああおいしかった、ねかしてもらいましょ、と云つて横になるや間もなく咽喉部に妙なぜいぜいという音がきこえましたので、どうしたと云いますと樂です、と答えましたので、それでもなんだか咽喉に妙な音がするではないかと重ねて申しますと、妻は從容として、これが臨終でしよう、と申しまして、医師を迎えるのもとめた位でした。それから種々に手を尽しましたが、その甲斐もなく翌朝四時に息を引き取りました――

最後に御葬儀の模様を寿夫様の御話から要約します。

大正七年五月、庭にイチハツの花が競い咲いている頃に亡くなられ、いよいよ午後三時出棺でした。午前中からお悔み客が沢山来られましたが、先生は午前十時すぎ、

「あの屏風をあそこに置いておくれ」  
と云われ、棺の安置してある部屋の隅を屏風で仕切り、

水をとつて身心ともに樂になつてからは、どうかこの樂なうちにはやく往きたいとよく言いましたが、今になつてその有様を思い浮べますと、あれが即ち「名残り惜しく思えども婆婆の縁つきて力なくして終るとき」であつたと思います。しかし其時は幸に落着きました、病人はまだ死ねなかつたと笑いながら申しました。

その頃老兄に法名をつけて頂きたいとお願いしました。それで法主台下が御見舞状と法名を認めて送つて下さいました、そのタベから急変し翌朝五時に息を引きとりました。然し御親翰を頂いた時はまだ元氣で一家中大喜び致しました。医者が「今日は衰弱は幾分増しているのに非常に元気がよろしいが」と不思議がられる程でした。私は妻に云いました。お前はもうして置きたいと思うことも終つて、何も思い残すことはない、どうぞ身体の楽なうちに往きたい、とよく云うが、私は夫とし、父として一日でも長く居てもらいたかった。しかし今日という今日はありがたい御消息を頂き法名まで賜つた。願つてもない幸に遇わせて頂いたのであるから、御前は猶更のことであるし、私も思いおくことがなくなつた、実に百万の富を頂いたよりありがたいことで、もういつなんどき往つてもいいよと申しましたら、妻も大いに喜びまして、こんな嬉しいことはないと申しました。

その中に引込んで誰方にもお会いにならない。お経があげられだしても出られず、寿夫様がたまりかねて二時頃に、屏風の中をそつとのぞき込まれると、先生はハンカチを驚撫みにして目に押しあて、必死に声をしのばせて泣き崩れていられたのです。悲しみに打ちひしがれた先生の姿に寿夫様は何も云えなかつた由であります。

こうした経験を持たれた先生は、清夫人を縁とされて、唯信鈔の末文の「今生ゆめのうちのちぎりをしるべとして來世のさとりのまえの縁をむすばんとなり云々」と、教行信証の「衆禍の波転ず」とあるところとを身をもつてお味いになられたのであります。

愚考いたしますのに、先生は四十二歳の時信心が開発され、その数年後に夫人がそれを実証されて往生せられたことは、先生の信の旅に、自利と他利の強い確信となつて、先生の生涯を貫ぬいて大きな力添えとなられたことであります。

私は清夫人にはお会い出来ませんでしたが、先生が云われました。お二人が一つにとろけきつていや一度も思い出したことではないよ、忘れたことはないからと云つたら、フーンと云つたよ」

と先生が云われました。お二人が一つにとろけきつていられた面影が先生の内心にいつもほの見えましたことは、地上の夫婦生活の至極と知らされますことあります。

## あとがき

只今、この原稿を編集中に、東京の池山千代子夫人から電話があり、寿夫様が急性肺炎で御逝去とのことありました。ここ数年健康をそこねていられ、昨年仕事から退ぞかれて東京で専ら御養生していられましたが、先月は急発作で入院、段々恢復との報せもあり、この秋の一一道会にはお迎え出来るかとひそかに期待しておりましたのに痛惜に堪えません。私共は池山先生の外から的一面に接しておりますが、寿夫様は御長男として家庭の内面から先生の信の旅姿を知らせて頂いて、先生の真面目を教えて頂き、先生の分身となつて下さった御恩を改めて謝しております。のこるは淨土での俱会二廻の佛の御誓いを期するばかりであります。先号に続いて池山先生の三十七回忌特集とさせて頂きまして、松本、保木、榎原の諸師から原稿を頂きました。青色青光、白色白光で、先生の御信徳が皆様の上で輝いている、そこに月光とおして、太陽の返照を仰ぐように、弥陀仏の無碍光に浴せて頂きました。私は、池山先生の信の歩

みに大きなお力添えとなられた清夫人について、皆様から伝聞したままを誌しました。幸吉さんが亡くなられる時、「お母さん」が亡くなつて何年かね、お淨土で待つておるよ、お前がさきに往つたら二人で待つておくれ」と言われ、愛子さんが先生の重病の末期にお念佛せられるようになった時、「あのお母さんも、今の母さんも、みんなよろこぶ」と清夫人の写真を指されたことも思い出されますが、心と心との完全なかよい合いは、生死をこえ、時空をこえて、はなすにはなされぬ一味の境を先生の上に拝するのであります。

### △御案内▽

時 十月二十七日（日曜）午後一時より  
所 ① 京都市右京区山田町、淨住寺。

京都駅より苔寺行きバス終点下車。  
新京阪、桂乗り換え、上桂下車。

池山先生三十七回忌記念一道会。

国内外共に動盪し煩惱の騒音に明け暮れるにつけ、いよいよ沢えわたる本願のたのもしさを仰ぎ遠き慈育を謝し奉りましよう

○一道会例会。毎月、第一、二、三日曜 午后一時半。南区駅上町三の八八

一道会館

市バス、新郊通り一丁目下車、東入る三筋目、左入る二軒目。

※地下鉄、新瑞橋終点下車、徒歩十五分。

※名鉄、呼続下車、徒歩二十分。

○教西寺法話会。毎月二十四日、午前午後昭和区小桜町二丁目四番地。

※市バス、御器所通り下車。  
※栄町より、松中（いりなか）行き、北山下車。

※名駅より⑦妙見町行き、御器所通り下車。

※名駅より⑦妙見町行き、御器所通り下車。

定 価	半 年	五〇〇円	（送共）
	一 年	一〇〇〇円	（送共）

編集・発行人	名古屋市南区駅上町二ノ八八
印 刷 人	花 田 正 夫
電 話	八三一局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷
----------------

名古屋市南区駅上町二ノ八八	
振替口座	名古屋 一〇四七〇番
郵便番号	四五七